

弘前大学医学部附属病院で診療を受けられる皆様へ

本院では、下記の研究を実施しておりますのでお知らせいたします。

本研究の対象者に該当する可能性のある方で、情報を研究目的に利用されることを希望されない患者さんもしくは患者さんの代理人の方は、下記の連絡先までお申し出ください。

1. 研究課題名	膵手術における術中出血量予測モデルの構築		
2. 対象患者	2007年から2020年の間に、当科において膵癌に対して手術をされた方を対象とします。		
3. 対象となる期間	2007年1月1日～2020年10月15日		
4. 実施診療科等	弘前大学医学部附属病院 消化器外科,乳腺外科,甲状腺外科		
5. 研究責任者	氏名	脇屋 太一	所属 消化器外科,乳腺外科,甲状腺外科
6. 共同研究機関 (共同研究機関研究責任者)	本研究は弘前大学のみで実施されます		
7. 研究の意義	<p>膵癌の成績向上は全世界の喫緊の課題です。膵癌診療において手術は非常に重要な治療法ですが、膵手術は大きな手術であるため、輸血が必要となる程の術中出血を来すことが度々あります。</p> <p>輸血は免疫を抑え、癌患者で手術後成績に悪影響を及ぼす可能性が指摘されています。輸血を回避する工夫として、術前自己血貯血(手術前に自身の血液を採って保存し、手術後に自身に戻す方法です。)や術中希釈式自己血輸血(手術の日に麻酔をかけた後に自身の血液を採って保存し、取採った血液量に応じた輸液を行います。そして、手術後に自身に戻す方法です。)という方法がありますが、それぞれ一長一短があります。ゆえに、その適応は過不足なく判断されることが望まれますが、現時点では客観的な判断は困難です。その理由は、手術前に術中出血量を予測できないからです。</p> <p>仮に、術中出血量を手術前に予測できれば、過不足なく輸血回避対策を講じることができ、結果として膵癌患者の予後向上に貢献することが期待されます。したがって、膵手術時の術中出血量を予測する方法を開発する意義があります。</p>		
8. 研究の目的	膵手術における術中出血量の予測方法を開発することを本研究の目的とします。		
9. 研究の方法 (使用・提供する資料等および外部に提供する場合の方法等)	通常診療の範囲内で得られた既存の情報を解析します。新たに検査や治療を追加するものではありません。カルテを利用し、病歴、年齢、性別、血液検査、画像検査、手術関連情報などの情報を使用します。得られたデータを予測法を開発のための学習用データと、有用性の検証のための検証用データに分けて使用します。機械学習技術を用いて、予測方法を開発します。		
10. 個人情報の保護	患者さんの名前をふせて(匿名化)、臨床情報を使用します。匿名化するための対応表は入室管理された部屋の鍵のかかるキャビネット内で保護をして講座内に保存されます。患者さんが解析対象となることを望まない場合、研究対象から除外します。診療情報の利用について拒否の申し出をされた場合であっても、当科での診療において何ら不利益を受けません。同意は、いつでも理由を問うことなく、自由意思で撤回できます。ただし、拒否の申し出をされた時点で既に学会等で成果を公表している場合、公表済の内容についての修正はできません。		
11. 利益相反に関する状況	本研究は通常の診療範囲内で行われるため、特別な資金源を必要とするものではありません。起こり得る利益相反について特記すべき事項はありません。		
12. 連絡先	消化器外科,乳腺外科,甲状腺外科 脇屋太一		
	電話	0172-39-5079	FAX 0172-39-5080